

がんばるぞ

平成六年度 四年 男児

ぼくは運動会がきらいです。それは、百メートル走でいつもびりだからです。春にあった子ども会の運動会もやっぱりびりでした。だから、「足の速い人はいいなあ、ぼくも速く走れるようになりたいなあ。」といつも思っていました。でも、速く走るのは無理だろうなあきらめていました。

学校の運動会も近づいてきた八月のある日、ぼくはか弱い気持ちでその事を、お父さんとお母さんに話しました。すると、お父さんは、

「じゃあ、練習しよう。」と言いました。ぼくは家族といっしょに練習すれば、心強いし、足が速くなれそうな気がしてきました。

さっそく、その日の夜、かめがさき公園のソフトボール場に、家族全員で行きました。まず、ぼくが走ってみました。お父さんはぼくの走り方を見て、

「手をたでさふて、つま先で立て走ってみれ。」と言いました。それで、ぼくはその通り走ってみました。

「あんまり極たんすぎる。」と今度は言われました。そして、

「お父さんの後さついでこい。」と言われ、お父さんの後ろで、お父さんのまねをしながら走りました。ぼくは、つかれて休みたくなりました。でもお父さんが、

「少しよぐなってきたぞ。」とほめてくれたので、ぼくはうれしくて元気が出てきました。そして、もっとうまくなって、速く走れるようになりたいと思いました。

それから、毎日のように練習に行きました。お父さんが仕事でいそがしい時は、お母さんと妹とぼくとで、学校のグラウンドに行きました。明るいうちは、まだグラウンドで遊んでいる人がいてはずかしいので、六時を過ぎて、だれもいなくなるところに行きました。タイムは、最初のころ二十秒くらいでしたが、だんだんと二十一秒くらいで走れるようになりました。

グラウンドには夕方になると、小さな虫が草むらからたくさん出てきて、ぼくが走っていると、顔や手にあたって気持ち悪かったです。でも、ぼくはぜったいびりにはなりたくないと思って、がまんして練習しました。運動会の前日も練習に行きました。その時は、お母さんと妹とぼくと

で行きました。練習も今日で最後なんだと思いながら走りました。走り終わった時、お母さんが

「十九秒。」と言いました。ぼくはうれしくて、とび上がりました。「お父さんに見せたかったな、あしたは三位になれそうだな」と思いました。

運動会の日がきました。朝起きて、今日は三位になってしようじょうをもらえるかもしれないと思うと、ぼくはわくわくしてきました。

いよいよ四年生の百メートル走の出番です。ぼくは一回目で、六人で走ります。待っているうちに、なんだかだんだん不安になってきました。みんなが、ぼくより速く走るような気がしました。

「位置について、バーン。」ぼくは、思いっきり土をけて走りました。他の人に負けたくない、あれだけ練習したんだからと思いました。

練習の時お父さんに注意されたことを考えながら、手を速くふって走りました。ゴールしたしゅんかんは、自分が何位かわかりませんでした。そして、自分が四位だとわかったときは、ちよつと残念な気持ちと、ほつとした気持ちでした。夕飯の時、お父さんが

「今日はいいけよ。」と言ったので、ぼくはうれしくなりました。来年は、もっと練習して三位めざしてがんばりたいです。